

新たなモナドロジーのほうへ

—— ベルクソン・タルド・ブルースト ——

西 脇 雅 彦

フランスにおけるライプニッツ（1646-1716）の本格的な受容は、一九世紀中葉にはじまる。遺稿や書簡、主要な作品などを収めたその全集が出版されはじめたのはこの時期からであり、さらに一九世紀末葉から二〇世紀初頭にかけては、個々の著作も多く刊行されることとなる。『弁神論』（抜粋を含む）は五つの版が、『人間知性新論』は七つの版が、そして『モナドロジー』に至っては、実に九つの版¹⁾が出版されているのである。かくしてこの時代、ライプニッツの哲学、とりわけモナドロジーが現代性を持って受け入れられていたことが確認される。

だが、それだけではない。一八八九年に発表されたシャルル・ルヌヴィエの『新モナドロジー』という表題が象徴しているように、時代は新たなモナドロジーのほうへと向かってもいたのだ。こうした方向性は、たとえばアンリ・ベルクソン（1859-1941）やガブリエル・タルド（1843-1904）の思索のうちに見て取れる。さらにそこには、影響関係が指摘されるなど、彼らと遠からぬところにいた、マルセル・ブルースト（1871-1922）の名を加えることができるのではないだろうか。

本論が目指すのは、ブルーストにおけるこの新たなモナドロジーにかかわる側面を、同時代の知的コンテクストを視野に入れつつ、明らかにすることである。そこでまず、ベルクソンとタルドを取り上げ、ブルーストとの関係性を概観し、彼らがいかにライプニッツ哲学と対峙したのかを見定めたうえで、ブルーストにおけるモナドロジーの受容および刷新の問題へと迫ってみたい。

1. ベルクソン

1-1. ベルクソンとブルースト

一八九二年一月七日、アンリ・ベルクソンはルイーズ・ヌビュルジェと結婚式を挙げた。彼女はマルセル・ブルーストのいとこにあたり、ブルーストはそこで介添役を務めている。こうして親類関係となったベルクソンとブルーストをめぐっては、これまで多くの論文が書かれてきた。なるほど記憶や時間、二つの異なる自我といった概念に纏わる関心、さらに知性に対する批判などは、両者に共通のものである。

では実際、ブルーストはベルクソンから直接の影響を受けていたのだろうか。この問いに対してたとえばアンヌ・アンリは、「ブルーストがベルクソンのうちに指針を見出したことを示す、

いかなる証拠もない³²」という回答を提示している。ジョイス・メゲイの一連の分析が明らかにしたのも、ブルーストはベルクソンと思索の対象を共有してはいるものの、記憶や時間や自我といった概念の内容については（自我にかかわる問題は本論で後に検討する）、親近性ではなく、むしろ相違のほうが見出されるということであった³³。メゲイはさらに、ブルーストがベルクソンのいくつかの著作を熱心に読んだとしても、それは主に、はからずも自らがベルクソンのようなかどうかを確認するためであったと述べている³⁴。

ブルーストはというと、『サント＝ブーヴに反論する』³⁵に収められている一九一三年のインタビューのなかで、自身の小説が「ベルクソンの小説」と呼ばれることに異議を唱えている（CSB, 558-559）とおおり、親類の思想家と結びつけられることを快く思っていない。ベルクソンのほうも同様で、ブルーストの死後のことであるが、「彼[ブルースト]の思想の本質については、まさに『持続』や『エラン・ヴィタール[生の躍動]』に背を向けるものなのです³⁶」と述べている。

もっとも、二人はお互いを直接非難しあうようなことはなく、相手に対しては賛辞を送っている。小説家に宛てた手紙において、ベルクソンが、『スワン家のほうへ』や『花咲く乙女たちのかげに』のうちに「内的現実の直接的で継続したヴィジョン³⁷」を見出したと記す一方で、ブルーストも、最晩年の一九二二年の五月初旬に哲学者に送付した『ソドムとゴモラⅡ』の献辞のなかで、ベルクソンを「ライプニッツ以来の最も偉大な形而上学者（より偉大な）³⁸」と評しているのだ。ここでブルーストは、ドイツの形而上学者を引き合いに出し、ベルクソンを称えている。それはブルーストが直接、ベルクソンの口から発せられたライプニッツへの称賛を耳にしていたからなのだろうか。あるいはベルクソンの著作を読んでいたブルーストが、そこにライプニッツの影を認めたからなのだろうか。さらに他の可能性も考えられるが、いずれにせよ、言及されていたドイツの形而上学者が、フランスの形而上学者に何らかの影響を与えたことは確かであるようだ。

1-2. 「予定調和」批判

ベルクソンのライプニッツに対する評価を知るには、個々の著作よりも、その『講義録』³⁹を紐解いてみるほうが示唆的であるように思われる。そこにはライプニッツについての比較的長い三つの講義が収められており、ベルクソンの態度がいわば体系的に示されているからである。

ベルクソンはライプニッツに一定の評価を与えていた。たとえば、神から無機的世界に至るまでに、完全性の程度の異なる意識の連続した系列があることは、「ライプニッツが見事に明らかに出した真理」（C I, 97）だとされている。また、「モナド論は物活論よりも完全で、より徹底した力動論の表現」（C II, 432）であるといわれてもいる。

しかしながら同時に、「モナド論の欠陥」についても触れられていて、それは「諸実体のコミュニケーション、モナド同士の相互作用といった観念を斥けたこと」（C II, 435）にあるという。ベル

クソンがライブニッツと距離を置くのはここにおいてである。すなわち「予定調和」が批判されているのだ。「予定調和は、あるモナドのなかで混雑して表象されるものが、別のモナドのなかでは判明に表象されることを要請する」(CⅢ, 114)。これは「相互補完的」であり、「影響関係の幻影」があるに過ぎず、宇宙における「諸事物相互の作用と反作用」がなおざりにされていると指摘される(CⅢ, 30)。一言でいうならば、「モナドがそれ自体のうちに自閉している」(CⅢ, 246)ことが問題なのだろう。こうした特性は「自由」を抑圧するように働く。一八九四年のアンリ四世校における講義録には、こうある。

あらゆる努力にもかかわらず、ライブニッツは私たちが解している意味での自由、未規定性と偶有性を含んだ自由を救いだすことに成功してはいない。その理由は、相互作用の観念が消滅し、彼にとってはそれが一致、予定調和の観念のなかで消失してしまったことによる。(CⅢ, 247)

このようにベルクソンは、相互作用の観念を欠いた「予定調和」を「未規定性と偶有性を含んだ自由」を救いだすことができないという点で斥ける。この「自由」にかかわる問題については、一八九九年に発表される『意識に直接与えられたものについての試論』⁽⁴⁾(以下『試論』と略記)の第三章で扱われることになるだろう。そしてそこにおいても、「予定調和」ないし「ライブニッツの決定論」は、「力」という「未規定な努力の観念」と相容れないことが再び批判されているのである(E, 139-141)。

ベルクソンとライブニッツの関係性については、より繊細な分析が求められることはいうまでもない。だが、ベルクソンが「予定調和」を斥けるかたちで自らの思索を展開していったことは確かであり、その試みは、モナドロジーを批判的に乗り越えていくものとして捉えることができるだろう。アンリ・ユードが一八八三年から一九一〇年にかけてのベルクソンの体系を「新しいモナドロジー⁽⁵⁾」と呼んでいるのも、そのためである。

ところで、ベルクソンのライブニッツ批判は実のところ、ある思想家に対する称賛と表裏をなしている。ガブリエル・タルドがそのひとである。ベルクソンは、「タルドが現実の根底に据えたもの」とは、「いくつかの側面においてはライブニッツのモナドと類似しているものの、ライブニッツ的モナドとは異なり、相互に変容しあうことのできる諸要素」だと述べ¹²⁾、当時を代表する社会学者に極めて高い評価を与えているのだ。

2. タルド

2-1. タルドとブルースト

タルドとブルーストの実生活における関係について、詳しいことはわかっていない。ただし、

間接的な繋がりでは確認できる。タルドはブルーストが通った政治学学院で教鞭を取っていたし、一九〇四年に社会学者が亡くなったとき、家族の依頼でその遺稿を整理したのは、ブルーストのリセ・コンドルセ時代の哲学教師、アルフォンス・ダルリュだったのであり、リセ卒業後も親交のあったダルリュ、およびベルクソンとともに、ブルーストが社会学者について語りあった可能性も大いにあるとされている³⁶。

実際ブルーストは、タルドのいくつかの著作を読み、そこから影響を受けていたようだ。この点については、リュック・フレスの論考³⁷や、とりわけアンヌ・アンリの分析³⁸に詳しい。アンリの指摘によれば、タルドについての直接の言及は、書簡集や小説、書き残された断章にもなく、ブルーストが翻訳したラスキンの『アミアンの聖書』の注³⁹に唯一見出されるだけであるが、社会学者は、小説家に、彼が長いあいだ模然と探し求めていた体系、つまり群生本能にかんする現象を説明する体系を提供したのだという⁴⁰。具体的には、『ゲルマントのほう』におけるサロンのありようが、模倣あるいは反・模倣を基礎とするタルドの理論を例証するものであり⁴¹、さらに影響関係が見られる小説のなかの挿話としては、一九一四年の戦争やドレフュス事件が挙げられるという⁴²。

ここでは『失われた時を求めて』⁴³（以下『失われた時』と略記）におけるドレフュス事件に纏わる挿話の一つを見てみよう。

ブルーストはタルドと同様、個人から出発する。ドレフュス事件にかんする現象も、たとえばゲルマント公爵を通して描かれる。ゲルマント公爵は、そもそもこの事件には無関心であったが、その後、熱狂的な反ドレフュス派となった人物である。その彼は、あるとき湯治に出かけ、そこで優れて知的なイタリアの大公夫人とその義理の姉妹と出会う。彼は再審の件を持ちだすが、彼女たちはドレフュスが無実であると主張する。それでも彼は、ドレフュスに不利な事実を挙げる。しかし、「知的なかたなら、何かあったなどとは思わないでしょう」とあえなく反駁されてしまう。かくしてゲルマント公爵は、「熱狂的なドレフュス派」（Ⅲ、138）となってパリに戻ってくるのである。

このような公爵の態度についてアンリは、「この信条の転移は、公爵がその貴婦人の信念を模倣したことに起因している⁴⁴」と指摘する。ここで「模倣」とともに、「信念」という語がもちいられているのは、故なきことではない。タルドが定義する「模倣されるもの」とは、端的に言えば、「信念」*croyance*と「欲望」*désir*だからである⁴⁵。アンリもこの点については触れていて、「信念」と「欲望」は、「ブルーストの分析全体にリズムをもたらす用語⁴⁶」であると述べている。実のところ、こうしてブルーストに対するタルドの影響を語ることは、タルドを経由したライブニッツの影響を指摘することにもなっている。社会学者の思索の源泉には、ベルクソンが示唆していたように、ライブニッツのモナドロジーがあり、「信念」と「欲望」とは、モナドに倣って新たに着想された、魂の「二つの力」だからである。

2-2.「刷新されたモナドロジー」

このことは、『社会学雑誌』に収められた「モナドロジーと社会学」^{ツシオロジー}(³²)において示されている。論考は、モナドという「ライプニッツの娘たち」が現代科学の中心に入り込んでいることを告げる一節ではじまる。タルドが言及するのはまず化学であるが、さらに物理学や自然科学、歴史、数学までもが私たちをモナドへと向かわせるのだという。重要視されているのは、「無限小」の概念で、それこそが「宇宙全体の鍵」なのである (MS, 314)。

もっともタルドは、宇宙をモナドロジックな世界として眺めているだけでなく、自らモナドの特徴を組みかえてもいる。彼の着想する「魂」すなわちモナドとは、先に述べたように、「信念と欲望」と呼ばれる二つの状態、あるいは「二つの力」(MS, 323) からなるもので、それは「無意識の状態を含むという唯一の特権」(MS, 324) を有しているという。ここでは「欲求」*appétition* によって、より判明な「表象」*perception* ——「表象」は無意識を含む——へと至ろうとするライプニッツのモナドに依拠しつつ、新たな「力」を備えたモナドの概念が創出されているのである。このように定義されたモナドは、「相互に浸透する、開かれたモナド」であり、それは「刷新されたモナドロジー」へと向かう (MS, 336)。刷新されなければならないのは、ライプニッツのモナドが「閉じたモナド」であり、「暗い部屋」だからである。つまりここで斥けられているのは、ベルクソンにおけるのと同様、「予定調和」(MS, 336) なのである。

それにしても、「相互に浸透する、開かれたモナド」とは、どのようなものなのだろうか。それは、「相互所有」によって動機づけられたモナドのことである。タルドによれば、「相互所有」こそが、「天体の美しいメカニズム」や、「驚くべき生命有機体の創造」を説明するのであり、このことは私たちの社会についても同様であるという (MS, 377)。したがって、「欲望」とは「所有」についての欲望であるだろうし、それはモナド同士が集合することにも繋がる。

それら[さまざまなモナド]は、なるほどお互いを自らの部分としているが、多少なりとも所属しあってもいて、それぞれが最高度の所有を熱望している。このことによって、さまざまなモナドがしだいに集中していくことになる。(MS, 378)

このようにして、統一性ないし同質性が[・][・][・]事後的に形成される。事後的[・][・][・]にというのは、「相対的な同質性は異質性から生まれる」(MS, 352) からであり、またそもそも、「統一性ではなく、多様性が事物の核心にある」(MS, 362) からでもある。タルドの思索の根本にあるのは、異質性ないし差異性、多様性なのである。よって「所有を熱望」するモナドの集合とは、多様な異質性からなるもので、同質性からなるものではないし、また予め定められたものでもないのだ。かくしてタルドは、「欲望」と「信念」を備えたモナド、「相互に浸透する、開かれたモナド」を宇宙の根底に据えたうえで、それらが「所有」を欲し、模倣という反復を行い集中していくなかで、

統一性ないし同質性を生み出す社会のありようを提示する。この社会学者の体系とはまさに、「刷新されたモナドロジー」と呼びうるものであるだろう。

*

ここまではベルクソンとタルドにおける新たなモナドロジーのほうへと向かう動向を見てきた。では、彼らと遠からぬところにいたブルーストは、どのようにモナドロジーの刷新を行ったのか。この点を明らかにするためにもまず、その受容の問題から見ていくことにしよう。

3. ブルースト

ブルーストはライプニッツをリセ時代には知っていた。このことは当時の中等教育のプログラムによって確認できる。プログラムでは一八八〇年から、リセの哲学級で『モナドロジー』を扱うよう定めており⁽²⁵⁾、一八八五年からはさらに、『人間知性新論』（序文と第一巻）および『弁神論』（抜粋）もそこに追加されている⁽²⁶⁾。したがって、一八八八年に哲学級に進学したブルーストにとって、ドイツの哲学者は極めて身近な存在だったのである。

そのブルーストは、ライプニッツのモナドを芸術理論の中心に取り込んでいるようだ。

3-1. 「深い自我」とモナド

ブルーストの芸術理論を語るうえで見逃すことができないのは、「深い自我」le moi profond という概念である。この語が意味するところについては、一九〇八年末から一九〇九年二月頃にかけて書いたとされる断章、「サント＝ブーヴの方法」に詳しい。それはつまり、「習慣や交際や悪徳において私たちが示す自我とは異なる自我」（CSB, 221-222）であり、「作品を作り出す自我」（CSB, 222）である。さらに、「作家の自我は、その書物のなかでのみ姿を現わす」（CSB, 225）という一節が含意するのは、その自我は作品を通してはじめて見出されるということでもある。したがって「深い自我」とは、日常の外的な現実ではなく、個人の内的な現実にかかわる自我、作品を創造し、作品によって明らかになる芸術家の自我を指すのだ。

ところで、ブルーストが提示する二つの自我の区分は、ベルクソンにおいても見て取れる。『試論』では、表層の自我と、内的な生にかかわる「[この]より深層の自我」ce moi plus profond (E, 83) は、明確に区別されているのだ。しかしながらジョイス・メゲイは、小説家と哲学者のあいだに親和性が見出されるのは、「外在性」が問題となる表層の自我についてのみだと述べている⁽²⁷⁾。つまりもう一方の自我については、内的な生にかかわるにしても、その概念には相違があるというのだ。この点を明らかにしているのはアンリ・ボネである。ボネは、ベルクソンとブルーストの自我について、「前者の深層の自我は、表現によって変容されることはなく、言語に還元されることもない。それは無意識へと向かう。反対に後者にとって、[...]深い自我は、いささかも表現を受け入れないものではない⁽²⁸⁾」と指摘している。事実ベルクソンは、深層の自我な

いし第一の自我は、「表現し難いもの」(E, 83)であると述べている。そして空間のうちに投影され、「容易に語によって表現される」(E, 92)のは、第二の自我、つまり「幻影の自我」(E, 83)だというのである。他方、プルーストにあっては、深い自我が創造する芸術作品とはそれ自体、言語による自我の表現であるといえるだろう。

したがって、「深い(深層の)自我」という用語および二つの異なる自我の区分については、なるほど、プルーストはベルクソンに多くを負っているともいえるのだが、概念の内容の相違を考慮するならば、プルーストの着想する芸術家の自我の源泉は、他にもあることが推測される。その源泉の一つは、ライプニッツのモナドにあると見て間違いのないようだ。

このことを示唆するのはまず、「文学と批評にかんする覚書」と題された断章のなかの、一九〇九年に書かれたとされる一節である。この一節では、はじめに、偉大な作家たちも案内人としては役立つことができないと語られ、その理由は、私たちが「自らのうちに磁石の針や伝書鳩のような、自分たちの方向感覚」を持っているからだと述べられている。そしてその少し後でプルーストは、「執筆活動を行っている自我という、多少なりとも主観的な自我」を「特殊なモナド」に譬えているのだ(CSB, 311)。フランソワーズ・ルリッシュはここに、モナドの「自律性の概念」を見出している⁽²⁹⁾。この点については『モナドロジー』において、外的な原因はモナドの内部に影響を与えることはなく、モナドは「内的原理」に基づいて変化する(§11)、と述べられているとおりである。またプルーストがソルボンヌ時代にその講義に通っていたエミール・ブートルーは、モナドは自らの「本質」を発展させることのみを行うと解説している⁽³⁰⁾。よってプルーストは、「内的原理」によって「本質」を発展させる特質を有するモナドを、芸術創造にかかわる自我に結びつけていると考えられるのである。そしてこの芸術家の自我は『失われた時』において、「魂」と呼ばれることとなる。

[...]独創的な音楽家である偉大な歌手が、そこに向かって自らを高めていき、思いがけずそこに立ち戻るもの、それが唯一の調子であり、この調子が、魂^{ソウル}という何ものにも還元できない個別的な存在の証明なのである。(Ⅲ, 761)

ここでいう「魂」とは、作品を創造し、作品によって明らかになる「深い自我」の謂いであるが、「何ものにも還元できない個別的な存在」といわれるその「魂」には、絶対的な差異性が見て取れる。この表現は、ライプニッツの魂すなわちモナドを想起させずにはおかない。というのも『弁神論』⁽³¹⁾には、「もろもろの魂のあいだには、元来個体的な差異がある」(§105)という一節が見られ、それは『モナドロジー』において、「それぞれのモナドは、他のすべてのモナドと異なっているのでなければならない」(§9)と反復されてもいるからである。

「深い自我」、「作家の自我」、「魂」といった語が同義であることはすでに見た。またそれらが

モナドの特質を備えていることも、今一度確認したところである。実をいえば、こうした芸術家の自我ないし魂とライブニッツのモナドも、同義であるといってよい。ブルースト自身がそう述べているからだ。一九一〇年にフェルナン・グレーグに宛てた手紙のなかで、ブルーストは友人の二冊の詩集を取り上げ、こう記している。

『永遠の絆』と、もう一方からそれを反映する小品『幼少期の家』のなかに、君のモナドが認められて、僕はとても満足した^{〔32〕}。(傍点は引用者)

ブルーストがそれを認めて満足したと語る「君のモナド」ta monadeとは、書物においてのみ姿を現わすという「作家の自我」以外の何であろうか。かくして、自らの芸術理論の中心をなす「深い自我」の重要な源泉の一つがモナドにあることを、ブルースト自身が明らかにしているのである。

3-2. 新たなモナドロジーへ

ブルーストはモナドを芸術に取り込んだ。そうであるならば、彼が理想とする芸術世界は、モナドロジックな様相を呈するはずである。事実、一九一三年のアンリ・ボルドーに宛てた手紙のなかには、そのような世界のありようが見て取れる。ブルーストはボルドーの小説『家』に触れ、次のように述べている。

[...]あなたの素晴らしい本は、それ自体大変重要であり、かつ、分かち難く結びつきあいながら、それぞれが自らのパートを奏でているあなたの諸作品のなかで占める位置においても、極めて重要なものなのです。それはまさに独創的なモナドなのですが、このモナドは、他のさまざまなモナドと深い調和にあるので、自らのやり方で他のモナドを反映してもいるのです^{〔33〕}。

ここではボルドーの個々の作品がモナドに譬えられている。そしてモナド同士は互いに映しあい、「深い調和」の状態にあることが語られている。つまり、ライブニッツのモナドロジーは、そのまま芸術世界へと転用されているのである。

ところが、こうした調和に基礎を置くモナドロジックな芸術の世界が『失われた時』のなかで示されることはない。一人の芸術家の諸作品のあいだに深い結びつきがあることは示唆されるものの、そこで強調されるのは「後からの統一」(Ⅲ, 667)だからである。ブルーストはここで、タルドに見られたように、予定調和的な統一性を斥けているのだ。しかしながら、ブルーストはライブニッツから離れてしまったわけではない。異なる特徴を備えたモナドロジーは、依然とし

て存在するのである。たとえば最終巻『見出された時』には、こうある。

芸術のおかげで、唯一の世界、自分たちの世界を見るかわりに、私たちは世界が多数化するのを見るのであり、独創的な芸術家が存在すれば、それと同じだけの数の世界を私たちは意のままに持つことができるのである[……。] (IV, 474)

この一節はライブニッツ的である。『モナドロジー』では、同じ街でも異なる方角から眺められると、眺望としてその街が「多数化されたように」なるのと同様に、モナドの視点と同じだけの世界が存在するとされているからである (§57)。つまり、『見出された時』の一節は、(予定)調和よりも「多数化」に力点が置かれたモナドロジーを提示しているといえるのだ。またその一節が示唆しているのは、それぞれのモナドが異なる視点から世界を表現するように、芸術家が独自のヴィジョンを提示するということである。事実、作家にとっての文体とは、「ヴィジョンの問題」(IV, 474)だとされている。そうであるならば、「世界が多数化するのを見る」というのは当然、私たちの視点と独創的な芸術家の視点＝ヴィジョンが重なり合うことを含意するに違いない。

事態は奇妙である。視点あるいはモナドとはそもそも、還元できない絶対的な差異性に基礎づけられたものであるはずだ。にもかかわらず、ブルーストの理論では、物理的に不可能であるような、芸術家と私たちの視点の共有が含意されているのである。ヴァンサン・デコンブが指摘するように、エルスチールの絵画を眺めるものが自らの視点を保持していたとすれば、そのひとは何も理解していることにならず、逆にいえば、エルスチールのものの見方を真の意味で理解することができるのであれば、それは「 $\dot{\text{E}}\dot{\text{r}}\dot{\text{l}}\dot{\text{e}}\dot{\text{r}}\dot{\text{S}}\dot{\text{t}}\dot{\text{e}}\dot{\text{r}}\dot{\text{I}}\dot{\text{e}}\dot{\text{r}}$ になる³⁶¹」という条件においてのみである。問題となるのは実のところ、ジル・ドゥルーズが述べているように、「個体的ではなく、個体化の原理」にかかわる形而上学的な視点なのだ。すなわちそれは、「その位置に到達するものすべての同一性を保証する視点」であり、個体よりも「上位にある視点」なのである³⁶²。「 $\dot{\text{E}}\dot{\text{r}}\dot{\text{I}}\dot{\text{e}}\dot{\text{r}}\dot{\text{S}}\dot{\text{t}}\dot{\text{e}}\dot{\text{r}}$ になる³⁶³」ということが意味するのは、このような上位にある視点への到達に他ならない。デコンブが巧みに表現しているように、通常では不可能なコミュニケーションに芸術がもたらす解決策とは、「魂の移動³⁶⁴」によるのだ。この「魂の移動」なくして、ブルーストの芸術理論は完成をみない。したがって次の一節が内包しているのも、まさにこのことなのである。

芸術によってのみ、私たちは自分自身から抜け出し、この宇宙について、私たちのものとは異なる宇宙について、一人の他者が見ているものを知ることができる[……。] (IV, 474)

もはや明らかだろう。モナドロジーのみならず、新たなモナドロジーが問題となるのだ。つま

り、芸術の創造にかかわる局面では、内的原理と個別的な差異性を有するモナドが直接取り込まれていたのに加えて、芸術の受容にかかわる局面では、そのモナドの視点とは、個体よりも上位に位置し、別のモナドによって共有されるものであることが示されているのである。ここに見られるのは、移動する魂という開かれたモナドによってコミュニケーションが可能となる、新たなモナドロジーに他ならず、これこそがブルーストにおける芸術世界のありようなのである。

*

＜予定調和＞を乗り越える新たなモナドロジー。一九世紀後半から二〇世紀前半にかけてのフランスにおいて、そこへと向かっていったのは、実体の相互作用を強調するベルクソンや、所有というかたちで相互浸透するモナドを着想したタルドだけでなく、移動によって視点を共有するモナドという存在なしには成立しえない芸術理論を打ち立てた、ブルーストもまた、そうであるといえるだろう。

注

- (1) Leibniz, *La Monadologie*: édition annotée, et précédée d'une exposition du système de Leibnitz par Émile Boutroux, Delagrave, 1880; éd. Th. Desdouits, Delalain, 1880; éd. D. Nolen, Baillière, 1881; éd. Henri Lachelier, Hachette, 1881; éd. M. l'abbé J. Martin, Poussielgue, 1882; éd. M. E. Segond, Palmé, 1883; éd. Alexis Bertrand, Belin, 1886; éd. Clodius Piat, Lecoffre, 1900; éd. H. Guyot, Poussielgue, 1904. 同書からの引用および参照については、エミール・ブートルー版に拠る。
- (2) Anne Henry, art. « BERGSON (Henri) », in *Dictionnaire Marcel Proust*, publié sous la direction de Annick Bouillaguet et Brian G. Rogers, Champion, 2004, p. 133.
- (3) Cf. Joyce N. Megay, *Bergson et Proust. Essai de mise au point de la question de l'influence de Bergson sur Proust*, Vrin, 1976.
- (4) *Ibid.*, p. 21.
- (5) Marcel Proust, *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et mélanges* et suivi de *Essais et articles*, édition établie par Pierre Clarac avec la collaboration d'Yves Sandre, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1971. 同書からの引用および参照は、CSB と略記し、頁数とともに本文中に記す。
- (6) Lettre de Bergson à H. Massis, [fin décembre 1937], in Henri Bergson, *Correspondances*, textes publiés et annotés par André Robinet, PUF, 2002, p. 1585. 二重括弧[原文ではギュメ]はベルクソンによる。
- (7) Lettre de Bergson à M. Proust, le 30 septembre 1920, in Henri Bergson, *Mélanges*, textes publiés et annotés par André Robinet, PUF, 1972, p. 1326.
- (8) *Correspondance de Marcel Proust*, texte établi, présenté et annoté par Philip Kolb, Plon, t. XXI, p. 163. 以下、同書からの引用は、*Corr.* と略記し、巻数と頁数を記す。
- (9) Henri Bergson, *Cours*, édition par Henri Hude, PUF, 4vol., 1990-2000. 同書からの引用および参照は、C の略号をもちい、巻数とともに頁数を本文中に記す。なお翻訳に際しては、『ベルクソン講義録』(法政大学出版局)における合田正人氏、谷口博史氏、江川隆男氏の訳業を参照させていただいた。
- (10) 同書からの引用および参照は、次の『全集』に収められているものに拠り、E の略号をもちいて、本文中に頁数とともに記す。Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, in *Œuvres*, édition du Centenaire, seconde édition, PUF, 1963. また翻訳に際しては、『意識に直接与えられたものについての試論』(ちくま学芸文庫)における合田正人氏、平井靖史氏の訳業を参照させていただいた。

- (11) Henri Hude, « Introduction » de *Cours I*, *op. cit.*, p. 19.
- (12) Henri Bergson, « Préface aux “ Pages choisies ” de G. Tarde », in *Mélanges*, *op. cit.*, p. 812.
- (13) Cf. Anne Henry, *Marcel Proust, théories pour une esthétique*, Klincksieck, 1981, pp. 345-346.
- (14) Luc Fraisse, « Une sociologie transfigurée: Marcel Proust lecteur de Gabriel Tarde », in *Revue d'histoire littéraire de la France*, 1988, vol. 88, n° 4, pp. 710-736.
- (15) アンリはブルーストへのタルドの影響をさまざまな箇所指摘している。Cf. Anne Henry, « Le kaléidoscope », in *Cahiers Marcel Proust*, n° 9, Gallimard, 1978, pp. 27-66; chap. « Le temps de la sociologie: le kaléidoscope », in *Marcel Proust, op. cit.*, pp. 344-365; chap. « Dans l'enfer des sous-groupes », in *Proust romancier, le tombeau égyptien*, Flammarion, 1983, pp. 121-147.
- (16) John Ruskin, *La Bible d'Amiens*, traduction, notes et préface par Marcel Proust, Mercure de France, 1904, p. 183, note 1.
- (17) Anne Henry, *Marcel Proust, op. cit.*, pp. 346-347.
- (18) *Ibid.*, p. 358.
- (19) *Ibid.*, pp. 352-355.
- (20) 同書からの引用および参照は、次のプレイヤッド版に依り、巻数と頁数を本文中に併記する。Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, édition établie sous la direction de Jean-Yves Tadié, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 4vol., 1987-1989.
- (21) Anne Henry, *Marcel Proust, op. cit.*, p. 353.
- (22) Gabriel Tarde, *Les Lois de l'imitation*, seconde édition, revue et augmentée, Alcan, 1895, p. 157. 強調はタルドによる。
- (23) Anne Henry, *Marcel Proust, op. cit.*, p. 350.
- (24) Gabriel Tarde, « Monadologie et sociologie », in *Essais et mélanges sociologiques*, Storck, 1895. 「モナドロジーと社会学」からの引用および参照は、MS の略号をもちい、頁数とともに本文中に記す。
- (25) *Plan d'études et programmes de l'enseignement secondaire classique dans les lycées et collèges (classes de lettres) prescrits par arrêté du 2 août 1880*, nouvelle édition, Delalain, p. 103.
- (26) *Plan d'études et programmes de l'enseignement secondaire classique prescrits par arrêtés ministériels des 22 janvier 1885, 28 janvier et 12 août 1890, 15 février 1892, 6 août 1895, 9 mars 1897 et 6 août 1898*, Nony, p. 88.
- (27) Joyce N. Megay, *op. cit.*, pp. 105-106.
- (28) Henri Bonnet, *Le Progrès spirituel dans Œuvre de Marcel Proust II: L'Eudémonisme. Esthétique de Proust*, Vrin, 1949, p. 30, cité par Joyce N. Megay dans *Bergson et Proust, op. cit.*, p. 101.
- (29) Françoise Leriche, art. « LEIBNIZ (Gottfried Wilhelm) », in *Dictionnaire Marcel Proust, op. cit.*, p. 563.
- (30) Émile Boutroux, note sur le paragraphe 77 de *La Monadologie, op. cit.*, p. 184.
- (31) 同書からの引用は、次のポール・ジャネ版『ライプニッツ哲学著作集』に収められているものに拠る。Leibniz, *Essais de Théodicée*, in *Œuvres philosophiques de Leibniz*, avec une introduction et des notes par Paul Janet, deuxième édition revue et augmentée, Paris, Alcan, tome second, 1900.
- (32) Cité par Fernand Gregh dans *Mon Amitié avec Marcel Proust (souvenirs et lettres inédites)*, Grasset, 1958, p. 142; *Corr.*, t. X, p. 108.
- (33) *Corr.*, t. XII, p. 142.
- (34) Vincent Descombes, *Proust. philosophie du roman*, Minuit, 1987, p. 57. 強調[原文イタリック]はデコンブによる。
- (35) Gilles Deleuze, *Proust et les signes*, 3^e édition, PUF, « Quadrige », 2003, p. 133.
- (36) Vincent Descombes, *op. cit.*, p. 57.